

草庵仏教

第153号
(発行日)
2003年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimy3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
毎月22日午後2時
.....
- * 念仏座談会
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
- * 8月の同朋の会は休会

宗教を見る眼を洗う

S 「日本では宗教と聞くだけで敬遠する人が多いのですが、どうしてですか」

D 「これにはいくつかのわけがあると思います」

S 「どのようなかかわりでしょうか」
D 「一つには、よく新聞で宗教がからんだ詐欺まがいの事件が報道されますね。ああいう報道が人びとに宗教ってこわいんだと思わせてしまうのではないのでしょうか」

S 「先祖の供養をしないとタタリがくる、といって高額な供養料を要求するというのがよくあります」

D 「それに最近のオウム事件は人びとに宗教への恐怖感を募らせてしまったように思います。ああいう宗教集団に勧誘されて入ってしまうと取り返しつかないことになるという怖れもありましょう」

S 「そうですね。何か特殊な宗教集団にいったん足を引っかかされてしまうと、社会からはじき出されてしまう不安。だから宗教には近づかないように用心をするのですね」

D 「そういう宗教集団をカルトというのですね。宗教的で閉鎖的な集団に子供などが入られると、もうこの社会にまともに

帰れないし、こうした狂信的な

グループから逃れられなくなるという怖れを私たちはもっています。こうした閉鎖的で狂信的なカルト集団は世界にたくさんありますから、宗教と聞くと用心深くならざるを得なくなるのですね」

S 「狂信的といえ、自分たちの宗教だけが正しくて、あとは全て邪教だといったり。あるいは自分たちの宗教に熱心なのはよいとしても、他の人の言うことにはいつさい耳をかさない態度、あるいは非常に特殊な教義を押しつける態度など、宗教に熱心な人によく見られるこうした態度に反感を感じることがしばしばあります。それで宗教を敬遠してしまう」

D 「(宗教にこる) という言葉がありますね。この言葉はマイナスイメージで語られますが、それはあなたが言われたような態度にふれて反感を感じる中から(宗教にこるとシマツが悪い) という話にまでなってしまうのでしょうか。ただ宗教に熱心なことそのことは大事なことで、片手間な趣味や道楽の一つのように扱っている限り、宗教の外側でうろうろしているだけとなります」

S 「いわゆる片手間ではあたり

さわりがいい分、永遠性のある真実にふれることも難しい」

*

D 「ええそうです。以上のように、宗教がらみの事件とか宗教に関わる人の狂信的な態度に不安や反感を感じて宗教を敬遠してしまうということがありますが、そのほかに近代は科学の高度に発達した時代ですから人のものの見方も科学的な見方が主流となります。それが大きな原因ですね」

S 「科学的なもの見方とは」
D 「物を観察し、実験し、計測して判断する態度です。目や耳などの感覚で実際に確認され計測されるものを(たしかにあるもの)と認め、目や耳で観察もできず、実験もできず、計量することもできないようなものは(ないもの)か(不確かなもの)で、そういうものは信頼しないとするのです」

S 「観察も実験もできないものに心のはたらきがありますね。そういう心の世界にかかわる宗教は不確かなもの、あるいは人間の幻想であるときえ思われてしまうのですね」

D 「そうですね。ところが今や心や精神さえも現代では、科学的な方法で研究しようとしています。実験心理学とか神経科学、あるいは脳科学というような学問は科学的方法で意識の本質や構造を確認しようとしています。けれども、心も外から観察すると、

神経細胞(ニューロン)のはたらきとしか見えないし、もっと分析すれば分子や原子の活動としか見えないのではないですか。こういう科学的な観測や実験的な方法で心の世界や意識の内容をどこまで把握できるのか、大きな問題です。ともかく、自然科学的方法が全盛の今日、心の世界に実験的に計測し科学的に確認しようとする方法を中心にしない宗教は、不確かなもの、空想的なもの、ときにはまやかしとさえ受け取られかねないのですね」

S 「心を外からの科学的な方法つまり観測や分析などで理解しようとすることは問題なのですね」
D 「そう思います。愛する子供が亡くなって流す親の悲しみの涙も、科学的な観測からすると、(神経細胞の化学的電氣的な反応とそれによる目からの分泌物)というデータになりかねません。子を失った親の悲しみは観測装置による観測データからは判断できません。それは内からいわば(人の心によって理解される)もの、心の内容は心によって知られるのであって、心を物質を観測する自然科学の方法と同じ方法によって知られるものではありません」

*

S 「心の本質は心によって知られるとすれば、私たちの心でどのようにすれば心の本質は知ら

れるのですか」

D 「そういう一つの方法が思惟といわれるものでしょう。たとえば仏教では内観、禪定、聞思などの方法によって心の本質に迫ったのです。すぐれた仏教学者だった故玉城康四郎博士はそういう仏教的思惟を（全人格的思惟）と名づけておられました。そういう思惟を禪定に入っ行って。それによって心を理解し、心にも道理や法則のあることを見いだしたのが仏法だといえましょう」

S 「だいぶ専門的になりましたから、話を元に戻しますが、科学的客観的な方法によってすべが解明されると思いいこんでいる現代では、正しい思惟によって心を知ろうという仏教などの方法論はなかなか理解されず、宗教（仏教）は客観性のない迷信のたぐいではないかという誤解が生まれるのでしょうか」

D 「ええそうです。心の本質的な内容はそれこそ（全人格的思惟）によって理解されねばなりません。それによって宗教の真実は確かめられてくるのです」

S 「そうですか」

D 「それと歴史的な観点から言いますと、日本の場合、江戸時代までは為政者や日本をリードしてきた人たちは仏教に深く関わりまた敬ってきましたが、江戸時代以後現代までは仏教は蚊帳の外におかれたままです。

江戸時代の指導原理は儒教であり、これは政治原理や人倫道徳であって宗教的な要素が薄い。

社会の指導者層が儒教を主軸とした人倫道徳を柱にしましたから宗教的なものの考え方は後退し、一般民衆も（お上）の考えを基準にして人生や世間を見る。それが250年間続いた影響は大きく明治以後もずっとその影響の下にあると言われています。要するに江戸時代以後仏教は歴史の表舞台から引き下ろされてしまったわけです」

S 「なにごとも（お上）にならう日本人の傾向から、だんだん仏教を大事なものと思う気持ちが薄らいできたのですね。」

D 「聖徳太子が日本の始まりに（三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり）と言われた精神は近世（江戸以後）になって失われていきました。明治に入ってやや仏教は盛り返しましたが、それと同時にヨーロッパの近代科学が急速に輸入され、科学的な価値観が浸透して、科学的なものの方が支配的になっていくことによって、宗教は（非科学的なもの）というレッテルが貼られてしまい、江戸時代以上に宗教に無関心な人びとが誕生していったのです」

S 「江戸時代は現世主義的とよくいわれますね」

D 「ええ。江戸時代までの日本人は現世だけではなく来世をか

なり意識しながら人生を送っていました、ところが江戸時代にはいると支配者の採用した儒教が現世だけに軸足を置く思想なので、その影響もあつて、だんだん民衆もこの世だけに目を向ける生活に変貌してきました。

その一つの表れに（憂世）という言葉が江戸時代にはいると（浮世）と表記されて使われるようになったという話を聞いたことがあります。現世を憂世と見る見方は来世に浄土に生まれることを願うという宗教的な願心が裏打ちされています。ところが憂世であるはずのものが江戸時代には浮世（享楽の世界）と受け取られ表現されてきたのは、現世は（享楽すべき世界）と見る見方に変わってきたことを意味します。この現世を浮世と感じる江戸時代の世界観は今日の日本人の世界観に連続としてひきつがれてきたといえましょう」

S 「なるほど」

D 「そういうわけで、現在の日本人は宗教に無関心であり、その宗教観はやせ細っています」

S 「今後の見通しはどうでしょうか」

D 「江戸時代における（宗教よりも道徳）（来世よりも現世志向）という風潮、それに明治以後における（経済と科学技術）が主軸になった生活観が、今日の日本人の生活観となり人生観とな

りました。それゆえ宗教を尊重しこれに真剣に向き合うことが無く、非常にやせ細った宗教観をもつことになり、それがためにさまざまに生まれてくる宗教に対して（真偽をみわけける眼）が無い。そのためにいわゆるさまざま宗教の（違いが分からない）。だから、まがいものの宗教に引き入れられて自分を見失い、自分を損ねるに至るとい

ケースがよくあります」

S 「なにが本当の宗教であるかを見る眼、違いが分かる眼が必要なのですね」

D 「ええそうです。一方、宗教はゴメンと敬遠している多くの人の精神生活はどうかといえは、経済と科学（医学を含む）と道徳さえあれば、あとはこの世の娯楽、道楽があればいいということになってしまいがちです。しかしはたしてそれで人生生活は満たされ、おちつくのでしょうか」

S 「今の日本は経済は停滞し、科学技術は人間に幸福を必ずしも約束しない。象徴的なのが原子力発電や核兵器で、私たちは破滅的な危険と隣り合わせの生活を余儀なくされています。しかも道徳は地に落ちています。経済と科学技術だけでは人間は幸福にはなれないし、それどころか道徳を向上させようというエネルギーも落ちてしまっています。あとは（とりあえず今の

楽しみを追う）ばかりで、目の前の安楽や娯楽を享受することにもつぱら意を注いでいます。けれども何か根本的に満たされない、何か大事なものが欠落しているという感覚は大勢の人がもっています」

D 「そうなんです。お金と健康と娯楽だけではいのちは満たされないしむなしというニヒリズムの感情が蔓延しています。こうした人間としての根本的な欠乏感を満たすものこそ（真実）であり、その真実とのであいついよう決定的に大事なことを実現しようというのがまことの宗教の意味であり意義なのです。それで21世紀に入り、この欠乏感を何とかしたいと願ひ、（まこと）にであいたという欲求が少し盛んになって来たように思います。そんなことで宗教にそれを求める人たちがだんだん増えてきているのはむしろ当然だと思

います。この問題に答え得るものは宗教以外には大変少ないと思います」

S 「そうすると未来はむしろ宗教と向き合わざるを得ない状況が増えてくるということですね」

D 「そう思います。そのためにもさまざまな宗教に対して、（宗教の真・偽の違いが分かる）眼をもつことが大切です」

歎異抄 第十三章第二講

よきところのおこるも、宿善のよ
おすゆえなり。悪事のおもわれせら
るるも、悪業のはからうゆえなり。
故聖人のおおせには、「卯毛羊毛の
さきにいるちりばかりもつくるつみ
の、宿業にあらざとということなしと
しるべし」とそうらいき。

(歎異抄第十三章)

現代語訳(善い心がおこるのも、過去の
世の善い行いがそうさせるのです。悪い
ことを考え、それをしてしまうのも、過
去の世の悪い行いがはたらきかけるから
です。今は亡き親鸞聖人は、「うさぎや
羊の毛の先についた塵ほどの小さな罪で
あつても、過去の世における行いによら
ないものはないと知るべきである」と仰
せになりました)

「よきところのおこるも、宿善のよ
おすゆえなり。悪事のおもわれせら
るるも、悪業のはからうゆえなり」とい
うのはどういう意味かと言えば、「今、自
分が善を行おうとする心が起るのは、
過去に善を行った結果であり、また逆に
悪を行おうとする心が起るのは過去に
悪を行った結果の表れである」というの
です。

ここで述べられている業についての
話は仏教教理での「業論」とは異なつて
います。

仏教の業論は「因是善悪・果は無記」

(因はこれ善悪、果はこれ無記なり)と
いうのが定説です。この意味は行い(因)
には善悪があるけれども、その行いの結
果(果)は善でも悪でもない無記である
といわれます。

もし、因が善であれば果も必然的に善
になり、因が悪なら結果も悪になるなら、
いつまでも同じ因果が循環するばかりで
す。過去の善い行いによって現在も善い
行いが行われ、過去の悪い行いによって
現在も悪を行うなら、もはや現在にその
人が善悪を選択する余地はありません。
過去に悪を犯したのなら、いつまでも悪
を犯し続けるほか無くなりません。

ところが仏教本来の業論では、過去の
行いに善悪があつてもその報いとしての
結果は悪でも善でもないのです、ただ苦
楽があるのです。善業の因によって楽が
結果するし、悪業の因によって苦が結果
します。だから重大な悪を行つたり、多
くの悪を行つて地獄に墮ちても、地獄そ
のものは善でも悪でもない、ただ極めて
苦しい境界です。しかし、苦しみの境界
に落ちても、そこで善を行うなら、その
結果、より楽な境界へおもむくことはで
きるといわれているのです。

そのつど人は「何をなすべきか」「い
かに行為するか」を選択し決定する自由
があるというのが仏教の業の理解です。

ただ「今私は何をなすべきか」を選択
し決定する時に煩惱にたぶらかされた
り、誘惑されたり、ふりまわされたりす
るために、してはならない悪の選択をし
てしまつたり、悪しき衝動に駆られて浄
らかな善を選択し実行することがなかな
か出来ないのです。

たとえていいますと、難民の救済のた

めに募金を求められた時、「ああかわい
そうだ、じゃあ一万円でも寄付をさせて
貰おうか」と決めようとする、「いや
いや、このお金があれば買いたいCDが
二三枚は買える」という娯楽への欲望と
か、「やっぱり一万円はもつたない」と
という惜しみ心の煩惱が起り、ついつ
いその煩惱に負けて、千円ほどの寄付に
してしまふ。

もし、そこで「ちよつと惜しいけれど、
飢えかけている人の苦しみを思えばこれ
ぐらひは問題ではない」というほどの善
意にもどつて一万円を寄付するなら、そ
れはより大きな善となる、というような
具合で、そのつど行為を選択する自由は
人間にはありますが、善をなかなか選ば
ないのは煩惱に負けるからです。

ではこの唯円房の言葉をどのように受
け取ればよいのでしょうか。それについ
て先人が、「この唯円房の言葉は仏教の
業論を語るのではなくて、(機の深信)
を語る言葉である」と教えてくださつて
います。

善を行おうとすれば煩惱に負けて行え
ず、悪を止めようとすれば怠け心や悪し
き誘惑に負けてしまつて悪が止められな
い。それでいつまでたつても自己変革が
できない、そういうどうしてみようもな
い我が身であるという痛烈な感覚がこの
唯円房の言葉のベースになっています。

それは、自分で自分を始末し、処理し、
理想化させることができないという自分
への不如意さ、自己の無能さを痛感した
ところから、善悪ともに人間の心の不自
由なことを「よきところのおこるも、宿
善のよおすゆえなり。悪事のおもわれ
せらるるも、悪業のはからうゆえなり」

と言ひ表されたのだと伺います。
人間には自由意思は道理的にはあり、
善を選び悪をやめる自由を与えられては
います。しかし、己の深く盛んな煩惱
に影響されて、「我が欲するところの善
はこれをなさず、我が欲せざるところの
悪はこれをなす」(パウロの言葉)とい
うのが我が身の実感としての現実であ
り、それゆえに我が力では、自分の心一
つもコントロールできない無力無能の人
間だという、そういう「機の深信」を唯
円房はこうした言葉で表現されたものだ
と思ひます。

次に、「故聖人のおおせには、卯毛羊
毛のさきにいるちりばかりもつくるつみ
の、宿業にあらざとということなしとし
るべし」とありますが、実はこういう内容
の言葉は親鸞聖人の書かれたものの中
には見いだせません。これは唯円房が聖人
から直接お聞きになつたお話を、ひよつ
としたら唯円房個人の実感や理解でもつ
てこのように表現されたのかも知れませ
ん。

もしこの言葉を補いながら述べると、
「過去の宿業によって煩惱熾盛の凡夫と
なり、ウサギの毛ほどのつくる罪も深く
て盛んな煩惱の影響に左右されて行つて
しまふ。それほど宿業に縛られている我
が身の不自由さを知るべきである」とい
つてもいいのではないのでしょうか。善行
をなしうるチャンスは毎日いたるところ
にあります。けれども欲や怒りや怠け心
や恐れや不安などの煩惱の心のために、
チャンスをもつてつぶしてしか生きて
いない。このような煩惱の身は過去の業
の蓄積(宿業)のゆえなのだと思ひな
さいとの仰せであります。(了)

生命観を問う

「人はみな死ぬと阿弥陀のいのちに帰る」という話が、今日では〈真宗の法話〉としてよくなされています。

このような話をする人もそれを聴く人も、何となく分かったような感じがし、従来のような「真実信心の人は正定聚に住す。正定聚に住すれば必ず滅度（浄土）に至る。信の無き人は正定聚に住しないから、涅槃の浄土に生まれずなお流転をかさねるのである」というお説教よりも、説く人も聴く人もすんなりと受け入れやすいのはなぜでしょうか。

その一つの原因は私たちが学校教育で習った科学教育にその理由の一端があるように私には思われます。

長年の学校教育で習ったことは知らず知らず私たちの考えのベースになっていきます。それで「人は死ぬとどうなるか」について、私たちが習った科学教育では、物理学的素養からは、人の体も元は原子なり分子である、だから死ぬというのも原子や分子の結合や配列の変化である、と理解するであります。

また生物学的素養では人間の体は細胞の集まりであり、それが有機的に結合した個体的生命として人はさまざま機能をもち、心のはたらきも大脳の脳細胞の働きである、だから死ぬというのは人としての個体的生命が機能を停止したことであり、死んだ体は焼けば元素的な要素

に還元する。だから死ぬと人間生命は要素的に分解して、姿も働きも心もなくなってしまう私は消滅する、というような理解になりましょう。

死ねば人としての生命体は活動を停止し、焼けば元素的な要素に還元する。それを「人が生まれるのも死ぬるのも大いなる自然の働きの中である」と表現できるでしょうし、もう少し詩的に言えば「人間死んだら大自然のいのちの中に帰る」と言いえるでしょう。

これは、今日の科学教育を受けた人にとって受け入れやすいお話ではないでしょうか。そうすると（生まれるのも死ぬるのも大いなる自然のいのちのいとなみの中である）というこの言葉は「人間死んだらみな阿弥陀のいのちに戻る」という話とは紙一重の表現だとさえいえないでしょうか。しかも、〈阿弥陀〉とは「はかりないいのち」という言語上の意味もありますので、そこから説明すれば、「大自然のいのちのいとなみ」を阿弥陀と言いかえてもほとんど抵抗はないと思えます。

そうすると「人間死んだらみな阿弥陀のいのちに戻る」という言葉がよく普及し、多くの聞法者にそう抵抗なく受け入れられてきたのは、私たちが仏教的生命観をもっているからではなくて、敢えて言えば公教育で長年習った科学的・物質的生命観がベースになっているからではないでしょうか。

だから「人間死んだらみな阿弥陀のいのちに戻る」を聴いて、「人間死んだらみな大自然に帰るんだ」とうなずき、ひいては「要するに私は死んだら無になつて大自然の中に消えていく」と了解するとすれば、それは科学的・物質的な生命観からではないでしょうか。

〈阿弥陀のいのち〉が大自然の物質的な生命と同じなのかそれとも別なものなのか私にはまだよく分かりません。たとえ「自然の生命活動と阿弥陀の寿命とは一つである」のが本当であっても、自他一如・生死一如と悟りきった仏様の智慧でおっしゃる「同じ」と凡夫の私が「同じ」というのとは違うと思えます。

もし「阿弥陀のいのちイコール大自然のいのち」と私たちが了解して聴聞するのなら、仏の教えを聴聞してもなお、科学的物質的な生命観の枠組みの中で仏法を聴く場合が多いことになり、私たちの考えは必ずしも仏教化するとはいえないと思えます。

しかも〈阿弥陀のいのちに戻る〉という話は、従来の教義でいわれてきた「阿弥陀の浄土に生まれて仏になる」と同じ意味なのかどうか、また信心獲得のことはいつさい問われずに「だれでも死んだら同じように阿弥陀のいのちに戻る」のかという、これらの点が曖昧なままに使われています。このことはもっと検討すべきことではありませんか。

ただ今回はこの話がこれほど普及した背景を考えてみたことです。（了）

〈住職つれづれ雑感〉

イラクへのアメリカの武力攻撃が問題となっている。政治評論家たちはその是非を巡って論じている。この問題をどう見るかについて、仏教では、一つは人間にとって、いのちとダンマ（真実）は最も大切なものであること。二つ目は積尊の言葉として〈ダンマパダ〉には、

「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」

「すべての者は暴力におびえる。すべての生きものにとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」

とのご教示があり、人間の大きな苦しみは暴力を受けることであると教えてくださる。この原点から考えると、相手から暴力をまだ受けていない前に、「危険性がある」というだけで大規模な武力攻撃をすることは非であるばかりでなく、当然それによって多くの民衆の生命が殺傷されてしまうという悲惨なことになります。

政治にも仏教という「忍辱」の徳が必要である。相手から困らせられても、相手が過ちを改めるまで辛抱強く耐えて待ち、善処しつづけるという大悲の智慧による忍耐が必要ではなからうか。それは朝鮮民主主義共和国に対する我が国の対応にも斉しく必要な大悲の智慧の忍辱であろう。

*政治の世界は正義よりも利害が優先することが多い。国政においても、正義よりも政治家個人の利害、所属団体の利害、政党の利害などが、倫理的な正義よりも優先される。このことが社会を濁悪化させている最大の原因である。これが濁世といわれる

ゆえんであろうか。